

Midnight Press

2010.5.12



「midnight poetry lounge」レポート 2

いま詩はどこにあるのかを尋ねて、海外詩の受容のあり方をも含めた日本の近現代詩史を再検討する試みのひとつとしてスタートした midnight poetry lounge vol.2 「西脇順三郎を読む 超現実主義と産土」が、2010年5月1日、講師に井上輝夫氏をお迎えして、神保町の東京堂書店6F会議室で開かれた。当日、遠路、安曇野から足を運んでいただいた井上さんは、パワーポイントを使って用意された明快な視覚資料をもとに話を進められた。その詳細は別添の資料をお読みいただければ、ほかに加えることばはない。

井上さんが編集された西脇順三郎の『ボードレールと私』（講談社文芸文庫）に収録されている「超現実主義詩論」は、読みにくい文章ではあるけれども、時々読み返したくなるころがある。

「詩は現実に立っていなければならぬ。しかしその現実につまらなさを感じることが条件である。なぜ人間の魂は現実につまらなさを感じるのであるのか。人間の存在自身が淋しい。その辺に遊んでいる犬もつまらない気持ちがしているのかしら、人間の魂を解剖してそのどん底まで行ってみると、この淋しい気持ちが本質的に存在している。人間が panser するがために却って苦しむ。」

引用が長くなってしまったが、この文体など、いかにも西脇順三郎らしいものであろう。横文字が頻出するところが少々難ながら、クセになりそうなヘンな魅力がある。そして、あらためて、詩人にとって「現実」とはなんであるのかと考えさせられもする。井上さんの講義を聴いて、「人間の存在の現実それ自身はつまらない。」「詩とはこのつまらない現実を一種独特の興味（不思議な快感）をもって意識さす一つの

方法である。」として、ことばによって人間存在のさびしさに触れようとする西脇順三郎の「超自然主義」詩法について、さらに考え続けたい。（文責・岡田幸文）



講師の井上輝夫氏

撮影 野口賢一郎

『ギリシア的抒情詩』から 西脇順三郎

天気

(覆された宝石)のやうな朝

何人か戸口にて誰かとさゝやく

それは神の生誕の日。

太陽

カルモチインの田舎は大理石の産地で

其処で私は夏をすごしたことがあつた。

ヒバリもみないし、蛇も出ない。

ただ青いスモゝの藪から太陽が出て

またスモゝの藪へ沈む。

少年は小川でドルフィンを捉へて笑つた。

『旅人かへらず』 1

旅人は待てよ

このかすかな泉に

舌を濡らす前に

考へよ人生の旅人

汝もまた岩間からしみ出た

水霊にすぎない

この考へる水も永劫には流れない

永劫の或時にひからびる

ああかけすが鳴いてやかましい

時々この水の中から

花をかざした幻影の人が出る

永遠の生命を求めるのは夢
流れ去る生命のせせらぎに
思ひを捨て遂に
永劫の断崖より落ちて
消え失せんと望むはうつつ
さう言うはこの幻影の河童
村や町へ水から出て遊びに来る
浮雲の影に水草ののびる頃



井上輝夫 1940年、兵庫県生まれ。
詩集に『旅の薔薇窓』『夢と抒情と』『秋に捧げる十五の盃』
『冬 ふみわけて』。
ほかに、『聖シメオンの木菟』などの著書、西脇順三郎の著作について編集したものなどがある。

会場風景

司会 中村剛彦



midnight poetry lounge vol.3

「今、吉行理恵の詩の魅力——記憶されるべき女性詩人——左川ちか、長澤延子、山本陽子など交えて」

中村文昭 中右史子 クリハラ冉 チョルモン

日時 2010年7月31日(土) 2時~5時

場所 神保町・東京堂書店6FJR 御茶ノ水駅8分) 会議室

会費 1500円

予約・問い合わせ先

poetrylounge2010@gmail.com (中村)

070-5579-1564

produced by midnightpress